

# エンカウンター (ENCOUNTER)

第274号

2025年2月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源「エペソ人への手紙講解説教」より (8)

キリスト教倫理は、教義の理解からくる実

パウロは、エペソ書3章までに、キリスト教の教義、福音の内容につきまして、こんこんと述べました。初めの3章は誠に金玉の文句でありまして、われら生まれつきの知恵と知識をもってしては誠に平平坦々といたしておりましたけれども、われわれに真理の御霊くだりたもうて、この意味を少しく理解することができましたならば、いかにこれが深い、いかにこれがわれわれに慰めの大きい、いかに我々に力を与える教義であるかということを知るわけであります。

不幸にしてわれらは罪深く、何十年まいりましても誠に馬事東風の如く、その意味を理解することはできませんけれども、われはまた時きたって聖霊われわれにくだりたもうて、このキリスト教の福音の内容がいかに深く、尊く、広く、無限の神の愛をわれわれに給うものであるかということをし

も知る日が一日も早く来るよう、われわれは念願したいと思います。

第 4 章から第 6 章、最後まで説かれるキリスト教信仰生活、キリスト教倫理、これはひとえに、3 章までに学びましたことからの理解から表れてくる実であります。そうでありますから、4 章以下のキリスト教倫理というものは、3 章までに学んだことを学ばずして、知らずしては、出てこない。全然人間道徳等の性質の異なる徳が表れてきているわけであります。

われわれは何十年たってもとちっともわれわれの人生が変わって来ない、未信者とちっとも変わらないゆえんは、3 章までに説かれている福音が理解されていないからです。このことはいくら強調しても強調しすぎることはない。信仰の裏です。

## キリスト教倫理の第1の徳目は、謙虚

「できる限り謙虚で、かつ柔和であり、寛容を示し、愛をもって互いに忍びあい」（エペソ書第4章2節）

2節の初めに「愛」という字が出てこない。初めに「できる限り謙虚で」という字が出て来る。キリスト教倫理の、信仰生活の第1の徳目は、謙虚 humble です。愛ではない。人を愛することではない。クリスチャンの第1の道徳は、自分が謙虚になることです。

謙虚に2義あり、第1の意義は、自分が罪深い悪人であるということを知ることです。自分は善人でない、悪人である。自分は間違いが多い者である、自分は正しくないということを知ることです。自分が親切の心が無い者だということが分かったら、お前は不親切だと人の不親切を責めることは出来ない。平和になる。自分は正しいことはないんだということが分かってくれば、お前が間違っていると、お前が悪いんだということは言わなくなる。われわれは人ばかりせめておって自分を責めない、クリスチャンにおいて。そのゆえに平和がない。社会に平和がなく、家庭に平和がなく、友人間に平和がないというのはこれです。自分が悪人であるということが分かっていない。

パウロはロマ書を書きまして、初めの3章を使って、われわれは罪人であり、滅ぶべき者である、正しくない者である。神の前に正しくないということを3章かかって述べた。われわれは罪人であり、不正なものであり、善行が

できないと、その自分の本当の姿を知ることが、これがキリスト教道德、クリスチャンの始めです。これがキリスト教の第1定理です。ロマ書において詳しく学びました。

永遠不滅の命、復活の望みを頂戴することを「救われた」という「からだは一つ、聖霊も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを目指して召されたのと同様である」（エペソ書第4章4節）

「あなたがたが召された」というのは、すなわち復活の望みを目指して召されたと同様、一つである。わたしたちの召された、善行を生ず為に召されたのは望みです、復活の望み。その復活の望み一つに、われわれは召されている。

キリスト教で「望み」と申しましたら「復活の望み」を言う。「永遠の命の望み」を言う。キリスト教では、それ以外は望みと言わない。キリスト教で望みといえば、われわれは肉体が滅んでそして天国へ帰り、キリスト再臨のときに復活してキリスト復活と同じ体を頂くこと、これを「望み」という。いくら繰り返しても、これがあるがゆえに、我々が日々生きることが出来る。他のものは消えます。これだけが不滅のものです。

この不滅のものを頂くこと、これを福音という。永遠不滅の命、復活の望みを頂戴することを「救われた」という。これのないものは救われていない。この望みのない者は、この世の俗人です。クリスチャンをすることを止めたまえ。

## 賜物は違う

「しかし、キリストから賜る賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりは、恵みが与えられている」（エペソ書第4章7節）

この1節は今日のレッスンでは一つの山でありまして、「われわれは主一つ、信仰一つ、バプテスマは一つであるけれども、賜物は違う」という。「われわれが持っている賜物は、量も質もみな違う」という。

これは誠に注目すべきことでありまして、パウロは他の所で、人間の体には目があり、耳があり、手足があるように、われわれの働きは皆違うと言っています。目の人もあるし、足の人もあるし、手の人もある。一つの教会を形成しているということは一つであるけれども、われわれみんな違うということでもあります。

聖霊として彼はこの世に下って、我々のうちに住み給う

「降りてこられたもの自身は」、すなわち、地下の低いところに下りて来られたというキリストは、「あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上まで上げられたかたである」。(エペソ書第4章10節)

すなわちイエス・キリストは復活されて天に上りましたが、また地上へ帰って、また下って、低いところまで下って、すべての人に満ち満ちるために下って来ておられる。現在、聖霊としてわれわれに下り給うて、そしてわれわれすべてに満ち満ちるためにイエスは復活したわけであります。

イエスはヨハネ伝においても「わたしはまた汝らに来て、そして父と共に汝らのうちに住む」と言われましたが、すなわち聖霊として彼はこの世に下って、我々のうちに住み給うわけであります。

## 復活の望みから出て来るキリスト教倫理

今日のレッスンにおいては、大体3つの重大な点があります。

第1は、キリスト教倫理というものは信仰の裏である。もっと簡単に言えば、復活の望みからキリスト教倫理は出てくる。復活の望みの裏です。復活の望みなくして、キリスト教道徳はない。それは自然に人間としてもって生れ出る小さな道徳です。キリスト教道徳というものは、復活という、われわれは復活させてもらうんだと、これが確立したときについてくるものです。そのことが一つ。

第2は、謙虚。その信仰から出て来る第1道徳は謙虚、謙遜ということ。謙遜に2義あり、もう繰り返さない。

それから第3、三つ目の今日の重点は、すなわち神が、われわれに信仰を給うて復活の望みを与えられて、そして各自、賜物は違うという。各自の仕事が違う。賜物が違う。それは全人類が救われるために、我々の賜物は違う。人々は仕事が違う。自分と同じ仕事を人に要求したらいけない。人々は皆、仕事が違う。

## 「偉大なる凡人」であれ

最後に内村先生の『続一日一生』の4月28日の文章、これは10年前にも読みましたが、非常に今日のレッスンに適切でありますから読んでみます。

「まことに神は公平でいましたもう。彼は天才を少数に賜いて、多数を顧みたまわらないのではない。かえって、より善きものを多数凡人に賜いて、彼らを祝福し給うのである。凡人たるの幸福、また特権は大である。神が何びとも賜いし意志の力をもって、何びともなし得ることをなすのである。神の造り給いし宇宙において、平凡は決して平凡でない。凡人もまた神に似て造られしものである。そして神を現わす点において、凡人は天才以上である。われら何びとも、持続せる忍耐と勤勉とをもって、「偉大なる凡人」たるべく努むべきである。」

## ロマ教会に近づかせて頂いている我が教会

内村先生が当時のロマ教会のことを『聖書の研究』誌上にお書きになりました。名をおあげになって、老人もいたであろうその小さな集まりが、地上のこの小さな集まりが、実に天の様子を地に映した、天上の生活の前味わいをしたこの教会のことを思うと言って、先生がロマ教会についてお書きになりました。

私もその先生の記事をよく思い出して、この教会が徐々でございませけれどもロマ教会に近づかせて頂いているのではないかという感じがいたします。そういうのは、内容が非常に霊的になってまいりまして、牧師を始め信徒の証言が非常に聖書的なものが増えてまいりまして、真に天上の生活の前味わいをすることが出来るという状態が展開しつつあるように私は思いまして、まことに感謝に堪えません。…

私もいよいよ 80 歳の年を迎えるに至りまして、少しく伝道者としての特権、伝道者の喜びを少しく味わいつつある。誠に感謝、感激に 耐えないところであります。

## 福音それ自体を伝える伝道者は非常に少ない

「そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった」(エペソ書 4.11)

伝道者すなわち福音を宣べ伝える人、これが現代、非常に少ない。福音以外のことを宣べ伝える伝道者は多いですけど、福音それ自身を伝える伝道者は非常に少ないことを私は感じます。これがキリスト教団がごたごたやっている理由です。伝道者がいない。福音というのはどういうものであるかということが理解されていない。この頃の牧師は、ただ人にちょっと親切にしたらいいぐらいがキリスト教と思っていると、私は想像する。

使徒、預言者、伝道者、牧師、教師、これは皆、福音に関与する者です。福音を述べ、福音を教え、福音を人に勧める。そういう福音中心の牧師が現代非常に少なくなっているのは、誠に残念なことであります。

この 11 節が非常に大切な場所であります。

## 聖公会の葬式は、天国をほうふつとする葬式

日本基督教団でのごたごたやっているのは、復活の望みで一致していないからです。もちろん新教にも長所あり、短所あり、旧教にも短所あり長所あり、聖公会にも短所あり長所がありますけれども、むしろ私は、聖公会、旧教をとる。間違ってもあんまり間違わない。ちゃんとガチッとしたことが残っているから、書いていること、特にお祈りとかいったガチッとしたものが、本当の聖書の神髄が文字になって表れているから。

聖公会の葬式とののは、なるほどという、天国をほうふつとする葬式です。

## 「信仰の一致」すなわち「復活の望み」

ここは幸いに、石館兄弟がすべての物質的負担を負ってくれて、私に存分勉強させてくれて、ここで説教させてくれている。私は教会を建てる必要がない。幼稚園をやる必要ありません。そんなことから収入を得る必要ない。

私はむしろ旧教や聖公会が間違っても、あまり間違わない。方角が西向いている。信仰が天国を向いている。しかるに新教の現在の信仰というのは、天国に向かずに地上を向いている。そんなものはキリスト教ではないですよ。一つの道徳です。そんなものは道徳教です。

本日のところは、「信仰の一致」すなわち「復活の望み」を中心に置いている。そこが私感じます第1。

## キリストに関する知識の必要、それは聖書の勉強

第2に感じますことは、今日のところに「子を信ずる信仰の一致」と、もう一つは「彼を知る知識の一致」と書いてある。理性的に彼を知る知識ということが書いてある。その一致です。宗教は感情のことではない。知識のことです。われわれはもう少し聖書を勉強して、キリストについて知る必要があります。know, knowledge の必要があります。もう少しキリストについて知る必要があります。キリストに関する知識の必要があります。それは聖書の勉強というということになる。

## キリスト教は、キリストの贖いから流れ出て来る

第3に感じますことは、伝道者の重要性です。伝道者というものがいかに重要か。エペソ書の初めには「キリスト教の土台である」とパウロは言った。このごろは土台がない。土台がぐらぐらしている。伝道者がいない。いないということは、言い過ぎでありますけど、少ない。

それから第4に感じますことは、これはごたごた書いてありますけれども、キリストの説明です。キリスト教というものは、キリスト行者とは言わない。キリスト信者と言う。キリストを信じて、キリストのものを頂戴することです。信も行もキリストから流れ出てくる。もっと具体的に言えば、キリストの贖いから我々に流れて出てくる。

今日のところに「キリスト」という字は9回出て来る。1 sentence に9回「キリスト」という字が出て来る。キリスト教の初めはキリストであり、キリスト教の中程はキリストであり、最後はキリストです。我々は心を低くして、謙遜になって、キリストの前に頭を下げて、キリストから学ぶ。これをキリスト信者と言う。キリスト行者とは言わない。